＜自由研究発表５＞

上級におけるマンガを用いた産出能力を伸ばす授業の試み

黒崎亜美（ラボ日本語教育研修所）

1. はじめに

近年、日本のマンガに興味を持ち、それが日本語学習の強い動機になっている学習者を多く見る。そのため、マンガを日本語学習に使用する試みもいくつか見られるようになった。しかし、その多くが、表現、語彙、内容確認など、日本語の受容を目的としており、日本語の産出能力を育成し、伝達能力を伸ばすことを目的とした実践例は多くない。また、マンガを用いて日本人とやりとりをする授業の実践報告もあるが、それも作品中のオノマトペや話し言葉の分析などを中心としている（杉山・田中 2008）。

本稿では、上級の学習者を対象に、「読む」「聞く」「書く」「話す」の四技能をのばすこと、またそれらを統合することを目的とした授業実践について報告したい。

2. 実践の背景

2.1 マンガ

マンガを読解する上で、学習者が難しいと感じる点を、マンガ特有のコマの進め方、デフォルメされた感情表現、こういったものを教師側はあげてしまうが、実は、難しさはそこにはない。多くの学習者は自国で日本のマンガを目にしており、マンガ特有と思われる手法には慣れているのが現状である。授業でマンガを扱う場合、小説同様、心情や表情の読み取り、ストーリー展開などに意識を向けさせることが、教える側の教師に求められる。

2.2 上級学習者

上級学習者はどのような力が求められるのか。日本語教育学会編『日本語教育事典』（大修館書店）では以下のように定義している。

> 高度の文型・文法、漢字（2000 字程度）を習得する段階。社会生活上必要な口頭能力と読み書き能力を獲得し、仕事や専門の勉強といった目的を日本語で達成できるようになることが目指される。学習時間 900 時間程度。（pp. 759）

この定義内にある「仕事や専門の勉強といった目的を日本語で達成できる」ためにはどのようなことが必要なのかを考える必要がある。実際の言語行動を考えると、四技能それぞれの独立した能力だけでは足りない。それらをいかに統合し、他者と情報のやりとりを行うかということに注目する必要がある。

3. 実践報告

3.1. クラスの概要

授業は、平均学習時間 1600 時間程度という学習者（韓国人男性２名、韓国人女性９名）のクラスで行った。全員能力試験１級を合格しているが、問題点としては、①他者に分かりやすく伝達する事ができない（これは文章、口頭ともに）、②聞いた話の内容は理解できるが、重要なポイントに絞り込む事ができない、③聞き手が、話し手の強調したい部分に気づけない、といった点があげられた。

3.2. 授業の概要

授業は、2008 年１月から３月までの計９回（１回 90 分）で、「ストーリー読み」という授業で行った。上記の問題点、つまり情報を的確に伝達し、受容できないという点を解決するための授業を行う必要があり、四技能を統合的に行う活動を盛り込む計画をたてた。

授業の目的は、以下のようになる。

【読む】　自分のペースで、ストーリーを読み、理解することができる。

【話す】　理解した内容をわかりやすく説明できる。
　　他の人の話のわからない部分について、適切に質問できる。

【聞く】　他の人が話しているストーリーが理解できる。

【書く】　説明に必要な人物相関図や説明が書ける（板書）。
　　聞いた内容をキーワードでまとめることができる（ノート）。

3.3. 授業の手順

手順は、以下のようになる。

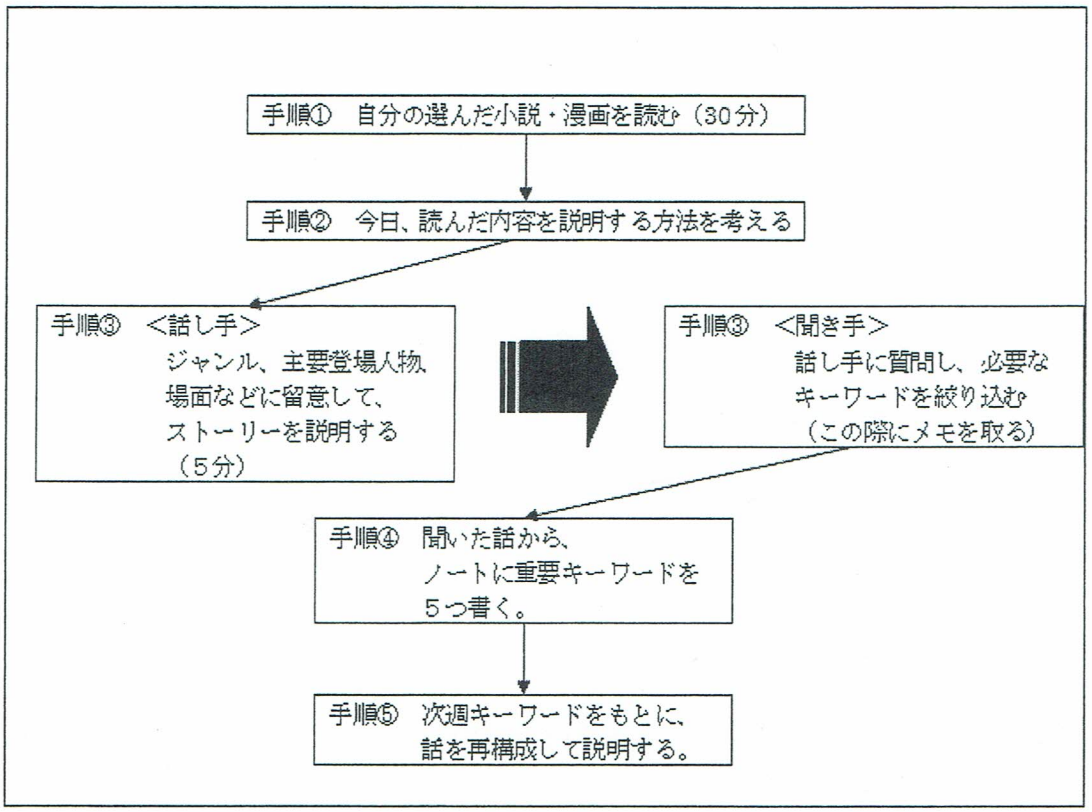

図１　「ストーリー読み」授業の流れ

実際の授業が開始される前に学習者はそれぞれ３ヶ月間を通して読む漫画もしくは小説を選ぶ。その上で、

手順①　授業内で 20～30 分、それぞれ黙読する。

手順②　黙読後、内容を他の学習者に説明できるようにメモをまとめる。

手順③　＜話し手＞である学習者は、＜聞き手＞であるクラスの他の学習者に読んだ本の内容を紹介する。その際に、ホワイトボードに必要な語や人物相関図などを提示しながら説明する。また、＜聞き手＞である残りの学習者は、＜話し手＞の話を聞き、終了後、分からなかった部分などに関して質問をする。

手順④　＜聞き手＞である学習者は、③で聞いた内容のメモを取る。重要だと思うキーワードを５つ書く。

手順⑤　次週、＜聞き手＞が書いたキーワードをもとに、再度、話を構成する。

3.4　授業の具体的な進め方

学習者は、事前に「ストーリー読み　作品リスト」の中から、3ヶ月間、自分が読み進める作品を選ぶ。その際に、リストにはマンガと小説の両方をあげておく。これは、年齢や国、またそれまでの読書経験などから、マンガでは読解に負荷がかかりすぎる学習者もいるので、どちらからも選べるようにした。

表1　「ストーリー読み」の授業で扱った作品

小説		マンガ	
「家日和」	奥田　英朗	「エマ」	森　薫
「いのちのパレード」	恩田　陸	「おおきく振りかぶって」	ひぐち　アサ
「縁切り神社」	田口　ランディ	「彼方から」	ひかわ　きょうこ
「漢方小説」	中島　たい子	「寄生獣」	岩明　均
「鹿男あをによし」	万城目　学	「神童」	さそう　あきら
「8．1」	山田　悠介	「洗礼」	楳図　かずお
「バッテリー」	あさの　あつこ	「デス・ノート」	大場つぐみ原作
「深追い」	横山　秀夫		小畑健漫画
「返事はいらない」	宮部　みゆき	「夏目友人帳」	緑川　ゆき
「リアル鬼ごっこ」	山田　悠介	「のだめカンタービレ」	二ノ宮　知子
「流星ワゴン」	重松　清	「ハチミツとクローバー」	羽海野　チカ
		「火の鳥（鳳凰編）」	手塚　治虫
		「ぼくの地球を守って」	日渡　早紀
		「メゾン一刻」	高橋　留美子
		「君に届け」	椎名　軽穂
		「Real　Clothes」	槙村　さとる

手順①　基本的には、学習者が自力で読みすすめる。ただし、教師に質問することや辞書を使用することを禁止しない。あくまでも自然な形で読み進める。これは、読み進めるためのストラテジーを学習者が自ら構築する必要があるためである。作品を読む時間はおよそ30分程度である。

手順②　黙読後、学習者にはその日読んだ内容を、他の学習者に伝えることを念頭に、どのようにまとめるかを考える。あらすじをどのようにまとめるか、その際に、アウトラインで考えるのか、スピーチ原稿を書き上げるのか、また、板書にどのように情報を提示するか、それらを学習者自身に任せる。

手順③　＜話し手＞となる学習者は、読んだ内容を整理し、伝えるだけが目的ではない。絵などで表現されている場面や状況、登場人物の表情、心情などを具体的に説明するため、自らの既習語句の中から使用すべき適切な語句を検索する必要が高まる。その一方で、＜聞き手＞が理解しやすく、かつメモにとりやすいように説明をすることも求められる。そこで、視覚的補助情報としてホワイトボードを用いて、人物相関図、内容を図式化したもの、また漢字などで説明するべき語句などを、どのように提示するかを考える。この過程で、学習者は、＜聞き手＞にわかりやすく伝達する内容構成、提示方法、話し方などに配

慮する事になる。また＜聞き手＞は、わかりにくい箇所を質問し、＜話し手＞の話す内容の要点と主要箇所の両方をまとめる必要がある

手順④＜聞き手＞である学習者は、質問をしながら＜話し手＞の話す内容をまとめ、重要と思われる語を５つ、ノートに記述する。このキーワードは、＜話し手＞の話の中に登場した語、またはその類語、それから話の内容をまとめた語などを書く。これは、話し手が強調した部分、ストーリー展開として重要な部分を読み取ることが求められる。

表２　＜聞き手＞が拾い出したキーワード
（作品例「デス・ノート」）

人数	キーワード（異なり語　11 語）
6	偽名（流河早樹）／心臓発作・父の心臓発作
5	東大合格・東大入学／（キラである）可能性５％
4	監視カメラ　／　近づく
2	電話（盗聴）／携帯ＴＶ／「自分はＬだ」／捜査
1	ポテトチップス

授業後、全員が提出したキーワードを、①全体でいくつのキーワードが出されたのか（異なり語数の数）、②それぞれのキーワードが何人が出したかなどを整理し、次回にフィードバックする。

表２は、一人の＜話し手＞に対して、＜聞き手＞全員が拾い出したキーワードの例である。＜話し手＞の話が＜聞き手＞全員にわかりやすくなれば、異なり語数と、一人の＜聞き手＞だけが出しているキーワードが少なくなる。またこれらの数から、すべての＜聞き手＞に誤解されることなく話せたことを＜話し手＞自身が確認できる。

4. まとめ

学習者からは、「スピーチやプレゼンテーションで、初めて相手がわかっているかどうか不安になって、相手の顔を見ながら言い方を考えた」「一人しか拾わないキーワードを出さないように気をつけた」などの声が聞かれた。また、「他の人が読んでいたマンガの先が気になって、話を聞こうと思った」という他者の話題提供に対して強い興味を持つという傾向も見られた。

今後、この活動がプレゼンテーション、研究発表などの言語活動につながり、学習者にどのような効果が出てくるのかという継続的調査が必要になる。また、現段階ではデータが足りない状態だが、この活動を継続し、マンガと小説で＜聞き手＞が拾い出すキーワードの数の変化がどのように異なってくるのか、またそれがメディアによる違いなのか、読解の難易度に違うものなのかなどの調査も必要と考えている。

【参考文献】

杉山ますよ・田中敦子（2008）「アニメ・マンガを用いた多様な授業の試み」『日本語教育方法研究会誌』Vol.5 No.1, pp.30-31　日本語教育方法研究会

日本語教育学会（2005）『新版　日本語教育事典』pp.759、大修館書店